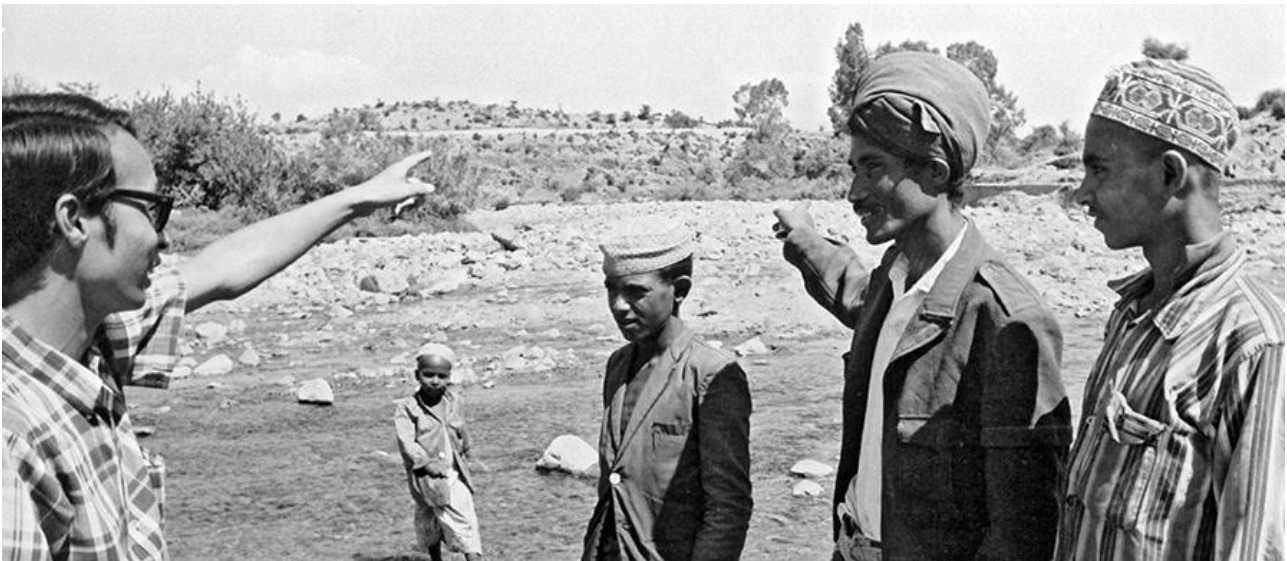


## 国連ボランティア第1団への参加とその後半世紀にわたる開発協力の旅路

伊藤 嘉一

農林省（現・農林水産省）で働いていた私は、1970年に国連開発計画（UNDP）がイエメンの開発のために日本人技術者をボランティアとして派遣するという情報を受け取りました。その前年に座右の書『貧困とのたたかい-国連の「良い戦争」\*』と出会っていた私は、このボランティアの機会に応募し、世界で初めて派遣された国連ボランティアの一人となりました。これはまた、四大陸にまたがる開発協力の長い旅路の始まりでもありました。



イエメン・アラブ共和国（現・イエメン共和国）の農家に深井戸開発の重要性を説明する国連ボランティア伊藤嘉一氏  
(UNV Archive、1972)

私は大学卒業後、農林省灌漑局の職員として農業政策を中心に日本の発展に携わっていました。そのような中で、1969年夏に在福岡米国領事館主催のシンポジウムにゲストとして参加した際に、領事より『貧困とのたたかい-国連の「良い戦争」』を頂戴しました。当時、国連ボランティア計画はまだ構想の段階でしたが、正式な設立に向けて準備が進められていました。翌年に UNDP がイエメンへ派遣する日本人ボランティアを募集すると聞いた時、私は『貧困とのたたかい』を通して国連の貧困削減の活動に関心を持っていたので応募することにしました。

当時の日本では、まだボランティアという言葉も浸透しておらず、ましてや国連システム内でボランティア活動を行うことに対する認知度が低かったため、派遣にあたり所属先の理解を得る事が最大の難関となりました。そのため、UNDP 駐日代表事務所に協力を仰ぎ、所属先の理解を得ることが可能となりました。

先述したとおり、『貧困とのたたかい』は国連ボランティア（正確には当時は、国連が公募したボランティアでした）に応募するきっかけとなりましたが、同時に派遣地がイエメンということも大きな動機でした。というのも、イエメンには農業土木の世界では誰もが憧れる聖地、世界最古のダム「マリブ」が

あります。そのような土地で日本人技術者が必要とされているということは光栄なことであり、大きなやりがいを感じました。

1971年に正式に採用され、まずはアメリカでアラビア語の語学訓練と任国事情の説明を受け、任地イエメン・アラブ共和国（通称、北イエメン。現・イエメン共和国）に赴任しました。北イエメンは砂漠ばかりではなく山岳地帯が多く、昔は「アラビアの幸福」と呼ばれたほど、今もアラブの穀倉地帯です。コーヒーが代表的な農産物で、世界的に知られているモカコーヒーもその一つです。しかし、当時は北イエメンは長く内戦状態でした。そこで、UNDPと協力して農業政策に重点を置き、カウンターパートの北イエメン政府の公共事業省や農牧省とともに国土復興のために尽力する事となりました。

派遣されたボランティアは、私を含めスウェーデン・フィンランド・イタリア・ノルウェーの各国から1名ずつとオーストリアからの2名の計7名で、1972年に正式に国連ボランティアとして登録されました。同年暮れには、エジプト・イラン・フィリピンなどから派遣されたボランティアが加わりました。農業土木技術者は私とイタリア人の2名で、他のボランティアは農業・栽培の技術者でした。

農業土木の技術者の主な業務は水資源の確保（飲料水と灌漑）でした。私は砂漠地帯を、イタリア人国連ボランティアは山岳地帯を担当することになりました。私は飲料水と農作物用の深井戸開発のため、山からの伏流水を電気探査で調査し、データを集めて井戸を掘るという業務を担いました。また、カウンターパートを含めたイエメン政府の職員に技術移転をすることで多くの深井戸開発に携わりました。この技術移転はうまくいったと自負しています。

イタリア人国連ボランティアは山岳地帯にため池を作るために日夜測量に明け暮れており、ため池の図面作成は、週末に国連ボランティアが全員で共同生活を送っていた宿舎で行いました。互いの技術を出し合って日伊共同の図面を作成し、公共事業省・農牧省と協力し、ため池を築造しました。農作物の栽培技術を担当していた国連ボランティアの意見も取り入れました。

乾燥地帯の水資源開発は飲料水を含めて重大な課題であり、一つ深井戸が成功すると、我も我もと新しい要請が出されます。シェイクという部族を収める立場の地元の長が要請を出す場合が多かったのですが、地形的に難しい場所は断る必要があるものの、どうしても作業しなくてはならない雰囲気があり、水脈がない事を証明する作業に追われた事もありました。「郷に入れば郷に従う」と言うことわざを実践し、地元の人々の真の願いは何かを聞く耳を持つ重要性を学びました。

国連ボランティアの業務を終えた後は、国連農業食糧機構（FAO）・海外経済協力基金（OECF、現・国際協力銀行）・外務省・国際協力機構（JICA）などに所属して、様々な国で座右の書『貧困とのたたかい』を実践できました。アンゴラ・ボスニア・アフガニスタン・エリトリアなどのいわゆる紛争地から、極東ロシア・タイ北部の黄金三角地点などの準紛争地域、そして貧困対策のためにマラウイ・ケニア・ジンバブエ・モザンビーク等の東アフリカ諸国や、ラオス・ブータン・ミクロネシア連邦といった南アジア諸国、ブラジル・コスタリカ・コロンビア・アルゼンチンなどの南米諸国と、振り返ると四大陸にまた

がって生活基盤整備に従事してきました。

この長い開発とのかかわりの中で、多くの国連ボランティアとの出会いがありました。特に記憶に残っているのは、カンボジアに派遣されていたポーランド人の元国連ボランティアとの出会いです。私は1993年春より2年間 JICA の事務所長としてポーランドに赴任し、新事務所開設にあわせて事務職員の公募をしました。その際に、彼らが応募したのがきっかけでした。ポーランド人2名と日本人1名の元国連ボランティアはカンボジアでの平和構築・開発の経験があり、開発協力を熟知している点を重視して全員採用しました。当時、ポーランドは社会主義体制から民主主義体制に移行する変動期で、ポーランド人職員には大変にお世話になった事を覚えています。応募してきた彼らは、ポーランドが欧州連合（EU）に加盟したことで事務所が閉鎖するまでの数十年にわたり勤務して頂きました。このつながりは長く続き、現在も交流があります。

大学を卒業して、波風なく国家公務員として勤務をしていた私は、国連ボランティア及び JICA 職員として海外支援の体験を通して、世界各国の人々と交流を重ね、今日に至っています。多くの紛争地にも行き業務を遂行できたのは、国連ボランティアとして培った経験の中で、座右の書『貧困とのたたかい』に書かれている「共に繁栄し、共に学ぶ」を体感したことによるものだと思います。多くの人脈に恵まれた幸せな開発協力支援活動であったと実感しています。座右の書の一部を引用して、この雑文の終わりといいたします。

「良い戦争の補給源は、持てる国から持てない国に向かってのびる食糧、基金、技術援助を中心とした広大な作業網である」

現在でも要請があれば、海外でも、東日本大震災で大きな影響を受けた東北など国内でも出かけています。生涯現役として、貧困と戦って行きたいと望んでいます。

\*マリアン・ウマリ著、井上勇翻訳、1967、時事新書



グローバルフェスタ JAPAN 2017にて（UNV、2017）